

||||||| 紹介 |||||

中国経済学界の動向

魯友章等編著『資産階級政治経済学史』

をめぐって

大林洋五

序

「世界史を学ぼう」「哲学を学ぼう」というスローガンとともに「政治経済学を学ぼう」というスローガンが雑誌『紅旗』などに掲げられるようになったところから^①、経済学関係の小冊子や雑誌論文が中国で目につくようになり始めた。それらの中には、ちょうど資本主義世界をおおった恐慌に対する関心から、恐慌を理論的に把握しようとするもの^②、マルクス主義の古典を学習するための解説や学習体験^③、帝国主義と国際独占資本に関するもの^④、とくに社会帝国主義とソ連経済に関するもの^⑤など、さまざまである。なかでも1954年以降、ソ連邦において刊行され、当時、社会主義諸国はもとより、日本などでもベストセラーとなった『経済学教科書』^⑥にかわるべき、経済学の教科書・概説書が、数十万部乃至百数十万部単位で各種刊行された^⑦。また、これらを理解するための用語辞典なども刊行された^⑧。

もとより、この時期に経済学の研究が急に進んだというよりは、過去の蓄積に対する需要が、この時期に急増したことのあらわれであろう。高級中学（日本の高校に当る）卒業程度の学力を持った知識青年が充満し、大学は収容できる人数が少ないのみならず、変則的であったことから、学習書は渴望されていたと思われる。

それらの内容について述べるならば、かなりわかりやすく、要領よく書かれている。日本のかなり難解な経済学の書物を見慣れた目には意外なほどである。その内容も決して低いものではない。しかしながら、それらの著作が毛沢東の方法論を十分に消化して経済学に活用しているかといえば、まだかなり不十分といえよう。また、これらの著作の大部分が「四人組」が最も勢力を張っていた時期の出版だけに、「四人組」の極「左」的理論の影響も見られる。このことに対する批判は、今後大々的に行われるであろうが、経済学学習熱は更に高まっており、1967年以来停刊されていた『経済研究』誌も1978年1月号より復刊されたように、今後ますます多くの

経済学に関する文献が刊行・掲載されよう。ここに紹介するのは、中国が西側（日本をふくめて）の経済学をどう見ているか、を彼等が系統的に書いた書である。上述の、教科書、概説書などにも、部分的にブルジョア経済学を批判したものは若干あるが、本書はもっともまとまったものと思う。

本書は魯友章、李宗正、呉易風の3氏の編著により、人民出版社から1975年4月に刊行された。B6版本文314ページ（約22万9000字）、定価0.76元。

編者の後書によれば、執筆において『経済学説史』（上冊）、『当代資産階級経済学説』等国内外の関係論著を参考にした。また初稿を書き上げた後、北京大学、南開大学、四川大学および北京師範大学経済系の関係同志から貴重な意見を提出された、と記載されている。

- ① 方海「学一点政治経済学（経済学をいくらか学ぼう）」（『紅旗』1972年第7期掲載）
- ② 武漢大学経済系北美経済研究室『戦後美国経済危機（戦後アメリカの経済恐慌）』人民出版社1976。など筆者の手許にも十数点の小冊子がある。
- ③ 北京大学政治経済学系『“政治経済学批判”序言、資本解説』北京人民出版社1974。中国人民解放軍駐天津某部理論組『“哥達綱領批判”与無産階級專政（“ゴータ綱領批判”とプロレタリアート独裁）』商務印書館1975。
 『“帝国主義は資本主義の最高階段”学習体会（“帝国主義は資本主義の最高の段階である”を学習し会得したこと）』北京人民出版社1974。この三つの文献に関するものが多いようである。
- ④ レーニンの帝国主義論の研究書（上述）のほか、実情紹介のもの、たとえば、吉林大学経済系世界経済教研室『美国跨国公司——新殖民主義的侵略工具（アメリカの多国籍企業——新植民地主義の侵略の道具）』吉林人民出版社1975。など
- ⑤ 龔良佐『蘇聯是怎样蜕变为社会帝国主义国家』上海人民出版社1976。（邦訳、藤村俊郎訳『ソ連はいかにして社会帝国主义に変質したのか』青年出版社1976）
- ⑥ 『経済学教科書』は1954年初版から、1962年の4版まで改訂された。邦訳は、いずれも合同出版社より、新書版各4分冊で刊行されている。中国で『教科書』がどう取上げられたか、また特に毛沢東がどう評価したかは、不完全なテキストに基づくものながら、矢吹晋訳『毛沢東政治経済学を語る——ソ連“政治経

済学”読書ノート』現代評論社1974, を参照。

- ⑦ 『学点政治経済学』上海人民出版社1972 (邦訳, 部分訳『政治経済学』先鋒社1974) '72年11月初版から '73年11月3版までに100万部印刷されている。

徐禾等編『政治経済学概論』人民出版社1973。(近く游仲勳監修, 折戸洪太訳で東方書店から刊行されるとのことである。)

青年自学叢書『政治経済学基礎知識』上海人民出版社1974 (上下2冊, 各45万部, '75年12月には改訂され合本となっている。) (邦訳, 松野昭二, 鳥井克之共訳『政治経済学の基礎, 資本主義篇』『同, 社会主義篇』東方書店1975。おなじく矢吹晋訳『中国社会主義経済の理論』龍溪書舎1975——後半のみ)

武漢大学政治経済系七一級工農兵學員編写『学点政治経済学(社会主義部分)』湖北人民出版社1976修訂本, 30万部

天津動力機廠, 南開大学経済学研究所聯合写作組『談談学点政治経済学』天津人民出版社1975。

『学一点政治経済学』北京人民出版社1976。

北京第2毛紡廠工人理論組, 北京師範大学政治経済系政治経済学組等編写『政治経済学問題解答』人民出版社1976。

哲学社会科学基礎読物『政治経済学講話(社会主義部分)』人民出版社1976。

『社会主義政治経済学』上海人民出版社1976。

于光遠, 蘇星主編『政治経済学(資本主義部分)』人民出版社1977。

ここに掲げたのは筆者の目にとまったもののみである。

- ⑧ 徐禾等編『政治経済学名詞解釈』人民出版社1974。(邦訳, 小林義雄監修, 折戸洪太, 石原享一共訳『政治経済学辞典』東方書店1976)

- ⑨ このような批判は, たとえば

上妻隆栄「社会主義的商品の弁証法的解明」(山口大学『東亜経済研究』第44巻3・4号, 1975。) P.19 など。

- ⑩ 董輛祁「一個反動的理論体系——“四人帮”組織編写的《社会主義政治経済学》批判」(『経済研究』誌1978年第3期掲載。

—

本書の内容を紹介するため、まず目次を訳載する。

第1章 資本主義的生産様式最初期の理論研究——重商主義

第1節 重商主義概述

第2節 重商主義発展の二つの段階

第2章 ブルジョア古典政治経済学の発生

第1節 ブルジョア古典政治経済学の発生と特徴

第2節 イギリス・ブルジョア古典政治経済学の発生——ウィリアム・ペディ

第3節 フランス・ブルジョア古典政治経済学の発生——ボアギュベール

第3章 フランス・ブルジョア古典政治経済学の発展——重農学派

第1節 重農学派概述

第2節 ケネーの経済学説

第3節 テュルゴの経済学説

第4章 イギリス・ブルジョア古典政治経済学の発展——アダム・スミス

第1節 アダム・スミス

第2節 分業と交換

第3節 価値学説

第4節 社会における三つの階級と三種類の収入

第5節 資本と再生産学説

第5章 イギリス・ブルジョア古典政治経済学の完成——デヴィット・リカード

第1節 デヴィット・リカード

第2節 価値学説

第3節 分配学説

第4節 蓄積と経済危機学説

第5節 対外貿易と比較生産費学説

第6章 フランス・ブルジョア古典政治経済学の完成——シスモンディ

第1節 シスモンディ

第2節 シスモンディの経済学説

第7章 フランス、イギリス・ブルジョア俗流政治経済学の発生

第1節 ブルジョア俗流政治経済学の発生と特徴

- 第2節 ジャン・バプティスト・セー
- 第3節 トマス・ロバート・マルサス
- 第8章 イギリス、フランス・ブルジョア俗流政治経済学の発展
 - 第1節 リカード学派の解体
 - 第2節 イギリス、フランス・ブルジョア政治経済学の俗流化の深まり
- 第9章 ドイツ・ブルジョア政治経済学
 - 第1節 ドイツ・ブルジョア政治経済学発生の特徴
 - 第2節 旧歴史学派
 - 第3節 新歴史学派
- 第10章 限界効用学派
 - 第1節 限界効用学派概述
 - 第2節 オースタリー学派
 - 第3節 数理経済学派
- 第11章 アメリカ・ブルジョア俗流経済学
 - 第1節 アメリカ・ブルジョア俗流経済学発生と発展の特徴
 - 第2節 クラークの俗流経済学説
 - 第3節 制度学派
- 第12章 マーシャルの俗流経済学説
 - 第1節 マーシャル俗流経済学説概述
 - 第2節 均衡価格論
 - 第3節 階級調和を宣揚する分配論
 - 第4節 マーシャルの独占資本のための弁護
- 第13章 独占経済学
 - 第1節 独占経済学——独占資本主義の産物
 - 第2節 独占競争（不完全競争）論
 - 第3節 拮抗力の理論
- 第14章 ケインズ経済学
 - 第1節 ケインズ経済学——国家独占資本主義の産物
 - 第2節 ケインズの「一般理論」
 - 第3節 ケインズの経済政策観
- 第15章 経済成長論
 - 第1節 経済成長論—発生の歴史的背景と主要な流派

第2節 経済動態理論

第3節 経済成長段階論

第16章 厚生経済学と「全人民福祉国家」論

第1節 厚生経済学

第2節 新厚生経済学

第3節 「全人民福祉国家」論

第17条 計量経済学

第1節 計量経済学概述

第2節 計量経済モデル例——インプットアウトプット分析モデル

二

目次を見てわかるように、本書の前半は古典経済学の流れを、「経済学批判」「資本論」「剰余価値学説史」をもとにして解説したものである。後半は、いわゆる近代経済学の諸流派を、ほぼ時代をおって紹介し批判している。近代経済学への中国の批判は、もち論本書のみではなく、さまざまな論文もあるが¹⁾、一通りその流れを扱ったものは初見である。近代経済学に対する研究と分析が、一応の水準にまで達したことの現れといえよう。

- ① たとえば彪如『什仏是凱思斯主義』上海人民出版社1974。(邦訳。川越敏孝訳『ケインズ経済学の崩壊』東方書店1975)

三

以下に本書において、マルクス、エンゲルス、レーニン、毛沢東の著作以外に、引用もしくは言及されている経済学者と文献名を各章別に掲げる。現在の中国書では、本書をふくめて、外国の人名、書名などは、原語を記載することはほとんどなく、いずれも漢字に音訳、意識していて、比定に困難を感じることがあるので、読者のため原著名を掲げる。〔〕内に著者が直接に準拠した版本を掲げた。とくにどのような書の中国訳がなされているか参考になると思う。なお名前が単に列挙されているのみの経済学者は、ここでは掲げていない。

第1章

John Hales, William Stafford

Antoine de Montchrétien

Thomas Mun: England's Treasure by Foreign Trade (1664) [商務印書館1959]

Jean Baptiste Colbert

第2章

Willam Petty: A Treatise of Taxes and Contributions (1862)

同: Verbum Sapienti (1665)

同: Quantulumcunque or Tract Concerning Money (1682) [上記3書, 商務印書館1963]

Pierre Le Pesant Boisquibert

第3章

John Law

François Quesnay: Tableau oeconomique (1758, 1756)

Anne Robert Jacques Turgot: Réflexions sur la formation et la distribution des richesses (1766) [商務印書館1961]

第4章

Adam Smith: The Theory of Moral Sentiment

同: Lectures on Justice, Police, Revenue, and Arins (1896)

同: An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations (1776)
[商務印書館1972, ただし上巻のみ引用。なお本書の全訳は1974年に出版されている。]

第5章

David Ricardo: The High Price of Bullion, a Proof of the Depreciation of Bank Notes (1810)

同: Proposals for an Economical and Secure Currency (1816)

同: An Essay on the Influence of a Low Price of Corn on the Profits of Stock (1815)

同: On the Principles of the Political Economy and Taxation (1817) [商務印書館1962]

第6章

Jean Charles Léonard Sismonde de Sismondi : De la richesse commerciale, ou principes d'économie politique à la législation du commerce (1803)

同 : Nouveaux principes d'économie politique, ou de la richesse dans ses rapports avec la population (1819) [商務印書館1964]

第7章

Jean Baptiste Say : Traité d'économie politique (1803) [商務印書館1963]

Thomas Robert Malthus : An Essay on the Principle of Population (1798) [商務印書館1959]

同 : Principle of Political Economy, considered with a View to their Practical Application (1820)

[商務印書館1962]

第8章

James Mill : Elements of Political Economy (1824) [商務印書館1963,「ブルジョア俗流政治経済学選集」収録]

John Ramsay McCulloch

Nassau William Senior : An Outline of the Science of Political Economy (1836)[1951英文版を引用]

Claude Frederic Bastiat : Harmonies économiques (1850) [商務印書館1963「ブルジョア俗流政治経済学選集」収録]

John Stuart Mill : Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy (1844)

同 : Principles of Political Economy, with Some of their Application to Social Philosophy (1848)

第9章

Friedrich List : Das nationale System der politischen Ökonomie (1841)[商務印書館1961]

Wilhelm Georg Friedrich Roscher : System der Volkswirtschaftslehre (1854—94) [商務印書館1963ブルジョア「俗流経済学選集」に収録,ただし第1巻のみ]

Bruno Hildebrand : Die Nationalökonomie der Gegenwart und Zukunft (1848) [1922ドイツ語版を引用]

Karl Gustav Adolf Knies: Die politische Ökonomie von Standpunkt der Geschichtlichen Methode (1853)

Roscher: Grundriss zu Vorlesungen über die Staatswirtschaft nach geschichtlicher Methode (1843) [1848ドイツ語版を引用]

Gustav von Schmoller: Grundrisse der allgemeinen Volkswirtschaftslehre (1900—04) [商務印書館1963「ブルジョア俗流政治経済学選輯」]

Adolph Heinrich Gotthilf Wagner

Lujo Brentauo

Wermer Sombart

Franz Oppenheimer: Manchestertum und Kathedersozialismus (1872)

第10章

Carl Menger: Grundsätze der Volkswirtschaftslehre (1871) [商務印書館1958]

Friedrich von Wieser

Eugen von Böhm—Bawerk: Kapital und Kapitalzins (1884) [商務印書館1959]

同: Positive Theorie des Kapitals (1888) [商務印書館1964]

同: Zum Abschluss des Marxschen System (1896) [黎明書局1934]

William Stanley Jevons: The Thory of Political Economy (1871) [中華書局1936]

Marie Esprit Léon Walras: Éléments d'économie politique pure, ou theorie de la richesse sociale (1874—77) [1926英文版を引用]

Henry Ludwell Moore: Synthetic Economics (1929) [商務印書館1959]

第11章

John Maurice Clark: On J.B. Clark ["The Development of Economic Thought" ed. by H.W. Spiegel 1952 収録]

Henry Charles Carey

John Bates Clark: The Distribution of Wealth: A Theory of Wages, Interest and Profit (1899) [商務印書館1959]

同: Essentials of Economic Theory (1907) [1927英文版により引用]

Thorstein Bunde Veblen: The Theory of the Leisure Class: An Economic Study in the Evolution of Institution (1899) [商務印書館1964]

同: The Theory of Business Enterprise (1904) [商務印書館1959]

第12章

Alfred Marshall: Principles of Economics (1890) [商務印書館1964]

John Stuart Mill: Principles of Political Economy... (1848)

Marshall: Industry and Trade A Study of Industrial Technique and Business Organization, and their Influence on the Condition of Various Classes and Nation (1919) [1927英文版を引用]

第13章

Joan Violet Robinson: The Economics of Imperfect Competition (1933)[商務印書館1961]

Edward Hastings Chamberlin: The Theory of Monopolistic Competition (1933) [三聯書店1958]

Paul Anthony Samuelson: Economics: An Introductory Analysis (1948) [1961英文版を引用]

John Kenneth Galbraith: American Capitalism: The Concept of Counter-vailing Power (1952) [1956英文版を引用]

同: The Affluent Society (1958)

Kurt Wilhelm Rothschild: Price Theory and Oligoly ["Readings in Price Theory" ed. by American Economic Association 1952 より引用]

Alfred William Stonier & Douglas Chalmers Hague: A Textbook of Economic Theory (1964)

Paul Anthony Samuelson: Economics; An Introductory Analysys (1948)[1961英文版を引用]

第14章

Alvin Harvey Hansen: Economic Policy and Full Employment (1947) [上海人民出版社1959]

Evelyn John St. Loe Strachy: Contemporary Capitalism (1956)

Arthur Cecil Pigou: The Theory of Unemployment (1933)

同: Employment and Equilibrium (1941)

John Maynard Keynes: The General Theory of Employment, Interest and Money (1936) [三聯書店1957]

同: Essays in Persuasion (1931) [商務印書館1962]

Roy Forbes Harrod : The Life of John Maynard Keynes (1951)

Dudley Dillard : Economics of John Maynard Keynes (1948) [1955英文版より引用]

Lawrence Robert Klein : The Keynesian revolution (1947)

Seymour Edwin Harris : Keynes (1955)

Joseph Alois Schumpeter : History of Economic Analysis (1954) [1961英文版より引用]

Hugo Hegeland : The Multiplier Theory (1954)

Richard Ferdinand Kahn : The Relation of Home Investment to Unemployment [“Economic Journal” Jan. 1931]

Paul Anthony Samuelson : Economics . . . (1961)

Hansen : Economic Issue of the 1960's (1960) [商務印書館1964]

Pigou : Industrial Fluctuation (1927) [1929英文版より引用]

第15章

Maurice W. Lee : Macroeconomics ; fluctuations, growth and stability (1960)

Evsey David Dower : Essays in the Theory of Economic Growth (1957)

Harrod : International Economics (1933)

同 : Towards a Dynamic Economics (1948) [1956英文版を引用]

同 : Economic Essays (1952)

Kenneth Kurihara : The Keynesian theory of economic development (1959)

Lelaud B. Yeager : Growth Economics, some questions about [“American Economic Review” vol. 44—1 (1954)]

Sammuelson : Economics . . . (前出)

Hansen : Economic Policy and Full Employment (前出)

Welt Whitman Rostow : The Stages of Economic Growth (1960)

Schmoller : Grundrisse der allgemeinen Volkswirtschafts-lehre (前出)

第16章

Pigou : The Theory of Unemployment (前出)

同 : The Economics of Welfare (1920) [1938英文版を引用]

Warren Benjamin Catlin : The Progress of economics ; a history of economic thought (1962)

Alba Ptachya Lerner : The Economics of Control (1944)

同 : The Economics of control : principles of welfare economics (1947)
英文版使用)

Ian Malcolm David Little : Critique of Welfare Economics (1960)

Stonier & Hague : A Textbook of Economic Theory (前出)

Johannes de Villiers von Graaf : Theoretical Welfare Economics (1957)

Hla Mint : Theories of Welfare Economis (1948)

Edward J. Mishan : A Survey of Welfare Economics 1939~1959 [“Economic
Journal” Jan. 1960]

Nicholas Kaldor : Essays on Economic Stability and Growth (1960)

John Richard Hicks : Value and Capital : An Inquiry into Some Fundamental
Principles of Economic Theory (1939)

Abram Bergson : A Reformulation of Certain Aspects of Welfare Economics
[“Quarterly Journal of Economics” Feb. 1938]

Samuelson : Economics . . . (前出)

Friedrich August von Hayek : The Constitution of Liberty (1960)

Hansen : The American Economy (1957) [商務印書館1962]

Keynes : The General Theory of Employment, Interest and Money (前出)

Robinson : Economic Philosophy (1962) [1963英文版使用]

第17章

Ragner Anton Kittil Frisch : Editorial [“Econometrica” 1933年創刊号]

Wassily W. Leontief : Econometrics [“A Survey of Contemporary Economics”
ed. by Harord Sylvester Ellis (1948) 所収, 1963英文版使用]

Antoine Augustin Cournot : Recherches sur las principes mathematiques de
la theorie des richesses (1838)

M. E. L. Walras : Éléments d'économie politique pure, [前出]

Vilfredo Pareto : Manuale di economia politica (1906)

Joseph Alois Schumpeter : The Common Sense of Econometrics [“Essays of
J. A. Schumpeter” ed. by R. V. Clemence 1951 所収]

Stefan Valvanis Vail : Econometrics ; an introduction to maximum likelihood
methods (1959)

Raymond J. Bye: Lament for Economics [“The Review of Economics & Statistics” 1957年5月号]

Leontief: Studies in the Structure of the American Economy (1953)

同: The Structure of American Economy 1919~39: An Empirical Application of Equilibrium Analysis (1951)

同: Quantitative Input and Output Relations in the Economic System of the United States [“Review of Economic Statistics” 1936 掲載]

四

本書は、かなり広範な分野をあつかっているだけに、論旨に直接の影響はないが、小さな誤、もしくは訳語の不統一が若干目についた。以下にそれを掲げる。

P.23 “ボアギュベールはルーアン**地方議会**の法官であった”

地方議会 (parliament) は「高等裁判所」の誤。

P.114 “マルサスは『経済学原理』において……**貴族**、**教会**、**収税人**を擁護して……”

収税人 (tax-eater) は「税金食い」の誤。

P.124 マルサスを批判するマルクスの文の引用。

……他方では、資本家にとっての十分な需要をつくりだすのに**一定額**の牧師や官吏が必要であることを……”

一定額の (gemasteten) は「栄養十分な」の誤。

同上、同上。

……当時のイギリスの状態、**地主精神**「国家と教会」、年金受領者、**租税受領者**、**十分の一税受領者**、国債、交易所仲買人……”

地主精神 (landlordism) は「地主制度」の誤。租税受領者 (tax-gatherers) は「徴税人」の誤。十分の一税受領者 (tenths) は「十分の一税」の誤と考えられる。

P.127 ジュームズ・ミルの著作 “**Elements of Political Economy**” を “政治経済学**要義**” と訳し、P.128 注では “政治経済学**綱要**” と訳している。

P.153 **社会政治協会** (Verein für Sozialpolitik) は「社会政策学会」の誤であろう。

P.159 ベーム＝バヴェルクの “**Positive Theorie des Kapitals**” を本文中では**資本肯定論**、注では**資本実証論**と訳している。

P.165 注2, ベーム=バヴェルクの減価償却の説明。耐用6年, 年率5%……使用1年後, その価値は $100+95.23+90.70+86.36+82.27=451.58$ は $100+\dots+86.38+82.27=454.58$ の誤

P.224 ハンセンの『経済政策と完全雇傭』の訳文中, ……アメリカにおいては, 二度の大戦の全時期に, ……失業人数は平均12%前後であり……は, 「二度の大戦の間の全期間に」……の誤。

P.226 ディラードを狄拉德と音訳しながら, P.237 では迪拉德と表記している。

結 び

本書は経済学史全体についての著作ではなく, ブルジョア経済学についての著作である。それゆえに, 空想的社会主義者の経済理論からマルクス, エンゲルスによる経済学の完成, レーニン等によるその発展と, ロシア十月社会主義大革命以降の実践といった, プロレタリアートの経済学には論及していない。マルスク以降のブルジョア経済学者が, マルクスを批判するにせよ, 慎重に迂廻するにせよ, 避けて通り得なかったことは明らかである。本書の後半をややわかりにくいものにして理由のひとつには, ブルジョア経済学者だちがマルクスの提起した問題をどう避けようとしたか(批判したものについては, たとえばバヴェルク, 若干の紹介と反批判がある)をつくことが弱いからではなかろうか。

このことは中国でも, 本書以外において試みられているし, ブルジョア経済学に対する彼等の研究が, マルクス経済学とブルジョア経済学の安易な統合を目的にしたものでないことも確かである。

プロレタリア経済学の萌芽, 形成と発展, そして一方では俗流化についても, 中国ではすでに若干の著書が刊行されている^①。これについて体系的な著述が刊行され, 本書と対して学習できるよう期待している。

① 空想的社会主義については, 本書の共編者の一人, 吳易風などの著がある。

吳易風『空想社会主義経済学説簡史』商務印書館1975。

蔡中興編著『19世紀初的空想社会主義』上海人民出版社1976。

マルクス経済学の俗流化については『伯恩施坦修正主義経済観点批判(ベルンシュタイン修正主義経済観点批判)』上海人民出版社1975。

また本論文の一の注⑤で述べたソ連社会の変質を論じた著作類も, 当然にマ

ルクス経済学の俗流化の問題にふれている。

本書は昭和51年度に山口大学大学院修士課程の外国文献研究のテキストに用い、院生の豊倉一二君とともに読んだものである。同君の協力に感謝する。また本書後半の近代経済学諸流派の紹介と批判の部分は、著者の苦手とするところであり、不明な点をしばしば山口大学経済学部の吉村、山本、貞木等の諸先生、および徳山大学の山岸猛先生等に質問し御教示を得た。御好意に感謝する。また序で述べた中国における経済学関係文献の出版状況などについては、1977年9月25日におこなわれた、中国研究センター創立準備会の研究会において九州大学の西村明先生がおこなった「中国の国家建設と経済学の諸問題」の報告とその後の討論に啓発され、またその資料の一部を使わせていただいた。感謝の意を表す。

なお、本書の訳書は、真実一男監修、鳥井克之訳で、東方書店から1～2年中に刊行される予定とのことである。